

書評

福永真弓著

『サケをつくる人びと——水産増殖と資源再生』

(東京大学出版会、2019年)

福本 拓

1. 都市研究者からみた『サケをつくる人びと』

本書の目的は、岩手県宮古市とりわけ同市の旧津軽石を対象地域とし、史資料や諸統計、さらにはインタビュー調査から得られたデータに基づき、サケの人工ふ化をめぐる歴史を説き明かすことにある。本書は、国家の法整備や国際的な資源争いといった広範なスケールの動向を踏まえつつ、自然と人間との関係を両者が混じり合う「^{あわい}間」に着目している点で、類書にない特長を有している。著者の福永真弓氏は、環境社会学・環境倫理学を専門とし、現在東京大学大学院・新領域創成科学研究科の准教授の職にあり、環境問題に対してフィールドワークをベースに価値の多様性や多声性の観点からアプローチした研究を展開している。

生業に対する関心は評者の専門である地理学でも高く、これまでに多くの研究蓄積がある。近年は、コモンズ論やポリティカル・エコノミー論をふまえた資源管理のほか、生業研究以外のフードシステム・フードレジーム論、あるいは植物工場のような人工環境における農作物生産など、「食」をめぐる研究は下位分野を横断して盛んに行われている。また、サケの回遊性ゆえに分析がグローバルからローカルというマルチ・スケールに及ぶ点でも、本書の射程と地理学との親和性は高い。

ただ、評者は都市地理学・社会地理学を専門の下位領域とし、国際人口移動と都市の関係を主たる研究対象としているため、一般的にあって本書の書評にふさわしい立場にはない。ただ、著者による自然と人間の「^{あわい}間」をめぐる議論やレジリエンスへの言及は、新自由主義下での世界の変容やその中で生じる都市問題に対しても示唆に富む。本書に関しては環境学や関連分野の専門研究者から多くの書評が公刊されるであろうし、この著作が持つ射程の広さを示すという意味で、全くの門外漢による評にもながしかの意義はあるだろう。

2. 本書の概要

ここでは、各章ごとの内容を概観し、本書の大意を整理したい。端的には、サケの人工ふ化放流に関わる技術や政策の展開が、広域的な漁業資源をめぐるコンフリクトとの関係から跡付けられるとともに、ローカル・スケールでの人間とサケの関係の変容が明らかにされていく。

第1章「去りゆくカワザケ、進む家魚化」において著者は、現代という時代においてサケ（特に河川を遡上するカワザケ）に注目する意義と、本書の主たる分析フレームワークを提示する。現代、地質年代に「人新世」を設ける動きがあるほど生態環境に対する人間活動の影響は甚大となり、しかも自然を保護・利用の両面において操作可能とみなす傾向も強まっている。その生が広範囲に展開するサケは、早くから人工的な生殖が行われてきた点で、自然と人間の「^{あわい}間」を考察する上で格好の事例となる。同時に、本書の分析が依拠するアクターネットワーク理論の概要が説明される。これは、非人間のモノ・出来事・概念の行為能力を人間と等価なものとみなし、それらの結びつく態様に注目する理論であり、近年多くの分野で導入が進んでいる。

続く第2章「空間を囲い込む—近世宮古湾の『サケを獲る人びと』」では、サケの遡上河川を抱える宮古湾・津軽石を事例に、ローカルなサケの捕獲・保護・増殖の展開がサケと人間との関係の歴史とともに示される。近世の津軽石は、沿岸漁村の利害対立や外部者の参入という背景の下で、サケの回遊魚という特性に応じた資源管理の仕組みを成立させていた。著者は、津軽石の人びとが地先を超える形でサケ資源所有を正当化していく過程で、サケが「わたしたちのもの」(傍点評者、サケを環境に対して諸種の間係を自律的に形成する主体とみなす認識の反映)になっていく経緯を描出し、そこに形成されたサケと人間の「^{あわい}間」の態様に目を向ける。

第3～5章は、明治期から戦前に至る時期を対象に、国家スケールでのサケの資源管理の制度構築と、それに対してローカル・スケールで生じたサケと人間との関係性の変化に着目する。第3章「増やす—近代日本と資源増殖」の主眼は、明治

期以降のアカデミックな水産学の成立と、漁獲量の低下に対応した国レベルでの「増殖レジーム」の形成にある。人為による蕃殖（繁殖）の助長が目指された増殖レジームでは、国家を介入主体とする必要性和ともに、資源の増殖が有する公共性が強調されていた。そして、これらの理念をベースに、官営のふ化場を中心とするサケの増殖体制が北海道を舞台に形成されていく（=北海道型人工ふ化放流システム）。

これに対し、第4章の「サケと漁場を取り戻す一人工ふ化放流技術の導入」では、明治大正期の津軽石に焦点を当て、明治初期に一旦失われたサケ漁場に対する権利回復の過程が明らかにされる。その際にキーとなったのが、繁殖保護の必要性に対する主張であった。すなわち、サケ漁業に関わることへの正統性として、津軽石の人々の歴史に裏打ちされた資源保護の意義や、増殖レジームの理解に基づく公益性の強調がみられた。

第5章「在地である—サケのムラの誕生」は、第4章に続く大正・昭和初期の時期に焦点を当て、人工ふ化技術の導入に伴いカワザケが専ら増殖のための捕獲対象へと変化する中で、サケを「わたしたちのもの」と捉える認識が生活文化と結びつきながら生成する過程が論じられる。つまり、津軽石では神事がサケとの関係で位置づけ直されたり、祭りの音頭の歌詞にサケが盛り込まれるなど、生活の諸側面にサケの存在が(再)配置されていたのである。サケが「わたしたちのもの」になった背景には、近代以降の新たな技術や国の政策を意識した、サケを基軸とするムラの創造的な改変あるいは適応があった。

ところが、第二次大戦後には、増殖レジームとそれに対応した地域のサケ漁業は大きな転換点を迎え、「わたしたちのもの」であるサケの「わたしたちのモノ」化（傍点評者、上述の「もの」ではなく、他との自律的な関係形成が失われた単なる事物としてのサケという認識）が進んでいく。第6章「獲る—沿岸から遠洋へ」では、戦後の漁村の経営不振という背景の下、漁業の主たる舞台が沿岸から遠洋へと移行し、増殖レジームが国際政治とも関連しながら再構成される経緯が跡づけられる。サケ・マスに関しては、北洋の公海上で

の大規模な操業が展開するが、国際的な資源保護への危機感によって母川国主義（サケが生まれた河川にその資源が属すべきという考え）が叫ばれる中で、資源保護は日本政府による交渉のための戦略として重要性を帯びるに至った。

第7章「獲るためにつくる—戦後のサケをつくる方法と制度」の焦点は、国際政治というコンテクスト下での日本の資源保護、特に人工ふ化システムをめぐる技術・学問・制度の役割に当てられる。戦後の自然環境の更なる悪化によって、日本では欧米型の自然増殖よりも人工ふ化に依拠せざるをえず、各国との漁業交渉の中で「数」をメルクマールとするふ化事業の再編が進んでいく。ここでは、系統群の選抜や、河川から河口あるいは海上へとという捕獲・放流場所の見直しなど、サケ資源の管理体制がサケの生を生物学的にも地理的にも細分化することによって形作られていく。これはサケの「モノ化」を象徴する動きであり、結果、遡上と回遊を特徴とするサケの生が海と川で分断され、公益性を帯びていたふ化事業が（サケ資源を採取する）受益者負担へと移行したことが指摘される。

なお、同時期、遠洋漁業から再び沿岸へと漁業の主舞台が移行した結果、政策面ではふ化事業とは異なる栽培漁業への着目も高まった。第8章「沿岸を『つくりそだてる』—栽培漁業と増殖」では、ふ化事業との差異化が意識されつつ、「自然の生産力の涵養」というワードに象徴される、増殖レジームが抱える二つの相反する思想が整理される。すなわち、人間が完全にコントロールしうる“箱庭”的思考と、それに対して不確実性をはらむ自立的な自然との交渉を念頭に置いた考え方である。

以上の戦後における増殖レジームをふまえ、第9～10章では再び宮古湾・津軽石の事例にスポットライトが当てられる。まず第9章「もう一つの戦後—土地にサケが根づくということ」において、戦後の津軽石でのふ化事業の変化が地域社会のありようととも論じられる。一時県営となっていた自前のふ化場は、津軽石の関係者によって戦後買い戻され、公営を中心とする北海道のふ化事業とは異なる展開を見せた部分があった。それは、

たとえばサケガラの販売の収益が地域の公共施設に使われるといった形で、サケのふ化から漁獲に至る一連の過程が地域社会の生活と密接に結びついていた。技術が進んで「モノ化」が進んでもなお、ふ化事業は地域で培われてきた「わたしたちのもの」としてのサケという認識に埋め込まれていたのである。

しかし、漁協の合併やふ化事業への関与の度合の縮小によって、津軽石においてもサケの「わたしたちのモノ化」は避けがたく進んでいる。第10章「離れゆく一^{あわい}間からの退出」では、第7章で示されたサケの生の断片化と「モノ化」が進む渦中における、宮古・津軽石の動向が論じられる。そこでは「数」をメルクマールとする増殖レジームの下であっても、人工ふ化への技術導入に際してはローカルな自然環境の特性に注意が払われ、健苗の育成と適期の放流こそが最重要だという認識が持たれていた。同時に、津軽石では、ふ化事業が合併先である宮古漁協の管掌となった後も、サケ捕獲に特化した団体を設立してサケ漁への関与の余地を残した。ただし、海中飼育や早期種の導入に伴う自然繁殖の停止によって、河川でのサケとの関わりは大きく変容することになる。すなわち、捕獲するサケの多くは「わたしたちのもの」ではない早期種によって占められ、川でのサケ(カワザケ)との関わりは減じた。しかしそれでもなお、元来の後期種に対する「わたしたちのもの」という感覚は残存しており、また結果としてサケの収量が増えたことは(捕獲という枠内ではあるが)サケのムラという表象の再構築に寄与した。

最後の第11章「増殖から再生へ—生を分有する責任」では結論が述べられる。ふ化場の技術者へのインタビューからは、「モノ化」してもなお自然繁殖群の存在がサケ資源の涵養に欠かせないといった、自然に対する身体化した知—特にサケが「モノ」を超えて有する自然との関係や不確実性に関する暗黙知—の存在が示唆される。このことは、本書の分析とあわせ、現在の増殖レジームが自然の生産力が持つレジリエンス(復元力)を失わせかねない危険性を指し示す。著者は、望ましい自然の生産力の涵養にとって、レジリエンスおよびそれと協働するケイパビリティ—生物の資

源化を可能にする諸要素—が必要だと説く。そして、これらの特性を可能にする領域こそが「^{あわい}間」であるとする。サケおよびその背後にある生命と自然のネットワークの存在を知り、それらの働きかけを受け止め、人間がこれら生物の生を分有することができる領域が「^{あわい}間」なのである。そこは、家魚化でも過去のノスタルジーを味わう領域でもなく、現前にある防潮堤といった構造物すらそうした分有の関係へと埋め戻されうる領域である。津軽石の人々はサケの人工ふ化をめぐる様々な変容を経験しながらも、常にサケと彼ら・彼女らの関係を更新し続けてきたのである。

総じて、本書が明らかにしているサケが「わたしたちのもの」から「わたしたちのモノ」へと移行する過程には、自然と人間との関係のあり方にとどまらず、技術や思想といった社会の根幹の変化を看取することができる。著者は、本書の冒頭にて、ある漁師の思い出話からサケと交感していた人間の姿を引く。驚きや怖さを人間に与え、何か思い通りにならない感情を抱かせたサケは、どこへ行ってしまったのか。このような交感が成立する「^{あわい}間」から何を読み取るのか。著者のメッセージはサケや漁業に限定されるものではないだろう。

3. 都市の「^{あわい}間」：他者との関係が生起する空間

本書が解き明かす人間とサケの「^{あわい}間」の動態から、評者は真っ先に網野善彦氏の『増補 無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和—』(平凡社、1978年)を想起した。元来、都市とは市を起源の一つとし、後背地となる農村から多様な人々が集う場所であった。しかも都市は、河川の中州といった、自然の営為によって地形が変化し、それゆえ所有者の確定が困難な無主地に立地する傾向が強かった。中世都市には、旅芸人や僧侶など、聖なる領域に属するとされつつも差別の対象となった人々が集い、他者との交感や交歓—福永氏の著作では前者に焦点が当てられているが—が生じ、世俗的な領主権力の及ばない一種のアジュールとしても機能していた。近世になると、こうした交感・交歓の場の多くは都市の縁辺部に立地する(都市の中央部に教会とそれに付随する広場・市場があるヨーロッパの都市とは対照的である)。

都市の縁辺部は、都市とその外部世界—言うなれば自然—との「間」と呼ぶうるものでもあった。

網野氏の主眼は、中世末期以降にこうした公共空間が世俗権力に覆われていく過程にあったわけだが、近代以降になると土地所有の明確化とともに資本主義システムに応じた都市の改変が進んでいく。と同時に、都市計画の領域では公園などのオープンスペースの整備も進む。都市という人工的な環境下での自然の導入は、防疫や健康面での必要性があっただけでなく、失われつつあった他者との邂逅をもたらす機会創出という機能も有していた。

しかし近年の都市では、こうした公共空間の私有化privatizationが進みつつある。近代都市は、元来、資本蓄積のための効率的な装置の一つとして存在してきたが、その内部に含まれる公共的な領域すら、利潤創出の論理が覆おうとしているわけである。東京・渋谷の宮下公園における「ナイキパーク」設立をめぐる一連の顛末は、こうした私有化の代表例として記憶に新しい。これと併行して、1980年代から顕著になったジェントリフィケーション（高級化）に伴うインナーシティのスクラップ・アンド・ビルドは、低所得者層の排除を助長している。私有化もジェントリフィケーションも、現代の資本蓄積に特徴的な空間的現象であるとともに、都市に包摂されるべき多様な他者を排除するという社会的帰結ももたらしている。

牽強付会との批判は免れないであろうが、本書の知見は都市研究者からすると次のような点で共通の問題関心を持ちうると感じた。第一に、著者が第11章でダナ・ハラウェイを引きつつ指摘する、人間の「モノ化」のプロセスとの関連が挙げられる。つまり、サケの生を分割し環境も含めて操作可能な対象とすることは、同時に、人間の生をもそのように扱いうる状況を生む。都市の文脈に照らして考えると、人々が資本の論理から解放されて他者と邂逅する領域がますます減じ、資本蓄積を第一義とする建造環境の中での生活を余儀なくされる現状がある。古典的なマルクス主義の図式に従えば、いわゆる「労働からの疎外」の突き詰められた形態の発現と言えるかもしれない。批判的都市理論で名高いアンリ・ルフェーブルの

リズム分析の観点からは、現代都市では人々の生活のリズムが資本蓄積とそれに基づく建造環境に制約される形で展開し、それらに抵抗するような創造的な日常生活のリズムが失われていると捉えられる。

このような日常生活のありようは、「食」との関係からも注目されよう。サケの増殖における効率性と安さの追求は、都市に暮らす人々がより安価に空腹を満たすこととも結びついている。そもそも、19世紀末からアメリカの都市が工業を中心に発展した要因の一つとして、中西部における機械化を通じた穀物の増産があった。都市において人々が労働のために食物を消費する際、もちろん「モノ化」されたサケもその範疇に入ってくる。このように、本書と評者の関心の間に、現代の資本主義システム下でのリスク管理や不確実性の排除といった共通点を見出すことは、それほど困難ではない。

第二に、都市と農村にまたがって諸スケールで展開する、現代の収奪をめぐる問題群との関係がある。第一の点とも関連するが、食料生産に携わるグローバル企業が、たとえばアフリカの肥沃な平野を購入して現地住民が貧困に喘ぐような事例は事欠かない。一方で、都市においても、上記のジェントリフィケーションのように、人々が特定の空間から追い立てられる事態が生じている。サスキア・サッセンは、これらを「放逐」と呼び表し、人々のそもそもの生きる権利が剥奪され、しかもそれが不可視化される状況に警鐘を鳴らす(S. サッセン、伊藤茂訳『グローバル資本主義と〈放逐〉の論理—不可視化されゆく人々と空間—』明石書店、2017年)。このような現状は、植民地主義の新たな形態と形容しうるものであり、現代の資本主義が都市と農村を貫く形で同種の問題を生じさせていることが理解されよう。

ただし、著者がサケ資源をめぐるレジリエンスに着目するように、都市における同種の機制に対する関心も高まっている。その旗手の一人であるジェフリー・デューバーティユは、新自由主義的な都市改変の残余たる空間が保持してきた、弱者のための支援組織の集中やそれらの関係性—彼はそれをサービス・ハブと呼ぶ—が、ジェントリフィ

ケーションの防波堤となり包摂の機能を果たすことに注目する (G. DeVerteuil, *Resilience in the post-welfare inner city*, Polity Press, 2016)。そもそも、ギブソン＝グラハムによる経済の「冰山モデル」が示すように、資本主義での賃労働に基づく生産と交換は、経済活動の冰山の一角にすぎない。その下部には、ボランティアや互酬的關係、インフォーマル活動、物々交換、家庭内生産など多様な営みが存在するのである。これらの活動は、現代の資本主義の下でサバイブする、都市の「間」とでも呼べるものが具備する性質ではないだろうか。この「間」において、他者との關係形成を通じ、そうした他者の自律性や私たちとは重複しないネットワークの存在を知ることは、「放逐」とは異なる世界を構想する一助になりうる。サケの生の分有のように、「間」をめぐる思惟は都市にも敷衍可能な特性を持つように思えるのである。

小する中でこそより明瞭に見えてくるのかもしれない。

4. おわりに

スタジオジブリ製作の『On Your Mark』(1997年)は、環境汚染が進んで人々が地下の都市で暮らす近未来を舞台にした、マニアに人気の短編映画である。SNS等でもしばしば話題になるが、そこでは人々は「バイオ蛸酢」「サバ(合成)」を肴に酒を飲んでいる。この映画は、全てが人知のコントロールの下に置かれた世界で、主人公の二人がたとえ死亡のリスクが高くとも地表へと脱出し、自分たちの希望をそこで解放つというストーリーから成る。「間」のなくなった世界で人々が求めるのは、逆説的に、「間」でしか得られないものかもしれない。

眼前のサケがどこから来たのか、評者を含め多くの人は知らないまま口に運んでいる。ただ、今のところ、それは単なるエネルギー補給にとどまらない行為ではある。切り身という断片化されたサケの生であっても、サケの旨味を舌で感じられるし、無意識的にはあれその味がサケの生命に由来していることは理解できる。都市においても、異質な他者との出会いの中で、他者の生やその背後にある關係性に想像力を発揮する感性はまだ残されているだろう。人間が人間である要件が何であるのかは、都市であれ漁村であれ、「間」が縮